あるむぜお44

府中市郷土の森だより　al museo NO. 44　1998年6月20日

園内歳時記

時の流れ....郷土の森園内は、植物たちの成長によって森としての深みを増してきました。自然植生というよりは、むしろ植えられた木の一本一本、草花の一群一群が根付いた結果によるものです。なかでも最近目立っているのは、四季折々に咲く花を植栽する計画に基づいたもので、初春を飾るウメに対峙するアジサイがその筆頭でしょう。梅雨空の時季、雨にけむる園内をおぼろげに彩る風情は、今後の呼び物となりそうな予感さえします。

アジサイは日本で生まれた園芸品種で、北海道南部から九州まで、どこでも見ることのできるユキノシタ科の樹木です。庭園や公園の植え込みに利用されたり、切り花、鉢物としても広く観賞用に栽培されています。よく知られている特徴としては、その成長過程で花の色が変化するということです。緑色から紫色、ついで紅色に変わっていく様子から“シチヘンゲ”の異名が付けられているほどです。これは生育土壌の酸性が強いと藍紫色、アルカリ性が強いとより赤みを増すという性質によるからだそうです。

もうひとつ面白いのは学名で、*Hydrangea macrophylla*、これに変種名の *otakusa*というのが付きますが、これこそシーボルトが愛人、楠本お滝を“おたくさん”と呼んでいたことに因んでつけたと言われています。

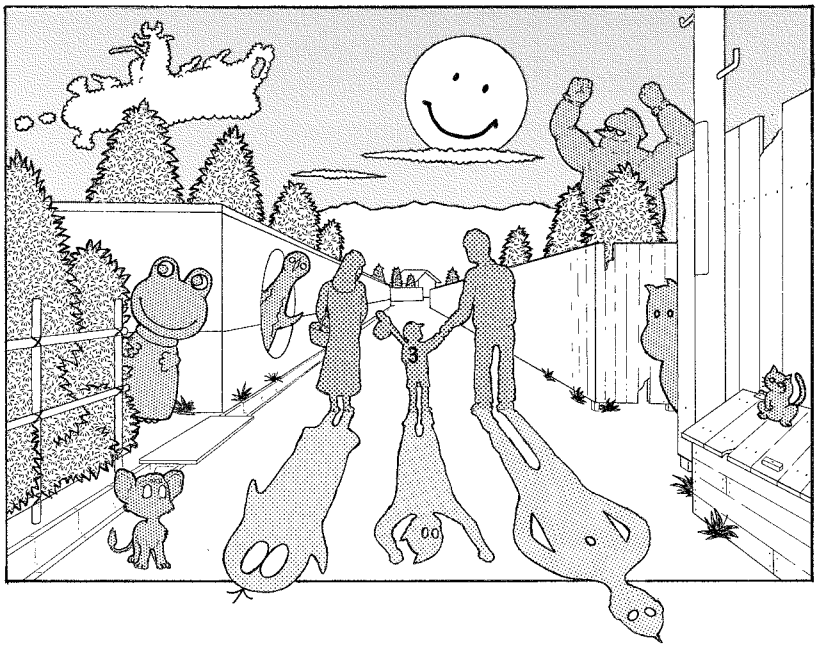
21世紀という新しい時代は、郷土の森をアジサイの花のごとく絶妙に変化させてくれるのでしょうか？

展示会紹介

特別展

ちょっとむかし展

7月19日(日)～8月31日(月)



1998年、20世紀も残りわずかの世紀末。新しい時代は、人類の歴史をどのような方向に導いていくのでしょうか？未来への不安と期待が入りまじる今、この時にこそ、ちょっとむかしを振り返ってみるのは如何なもんでしょう。自分史を再確認すると同時に、少年時代の愛読書、愛聴盤、愛用品がいかに興味深い形や内容で構築され輝いていたか、その文化の一端を今度は、大人になった自身の目で眺めることができるはずです。

折しも60年代は、日本経済の高度成長と近代化が進み、「もはや戦後ではない」時代の変革が顕著に現われてきた時期でした。技術の発展と近代化によりもたらされた消費文化は、電気冷蔵庫からテレビといった家電製品による家庭の電化を進め、自動車による都会のモータリゼーションを促し、人々は美しいファッションに目を向け、レジャーの多様化が発展していったのです。そんな時代に産声をあげた現在の30代・40代の人たち。振り返れば、ともすれば忘れ去られてしまいそうな思い出の数々が、誰しもの心の奥底にしまいこまれているはずです。“激動の昭和”を代表する幾多のニュースを背景に、朝から晩まで読み耽っていた名作マンガの一コマ一コマ、擦り切れるほど聴いた当時の言葉で言うところの「流行歌」のレコード、友達と時間を忘れて夢中になった元祖ゲーム盤、これらひとつひとつの事象や物を通して、その頃の自分が何をしていたのかを思い起すことができます。

博物館には、数多くの資料が保管、展示されています。その一点一点は、時代を振り返りながら、その物を通して文化を考えさせてくれる貴重な存在です。しかし、見る側からすると、その時代を生きてきたわけではなく、伝え聞いた範囲で学習し、それらを確認する形で資料を目のあたりにするわけです。これが自身の成長する過程で、実際に接してきたものであればどうなるでしょう。もちろん価値的には、まだ博物館資料には程遠いものばかりと考える人も多いでしょう。でも、自らが体験してきたものほど、振り返った時の感動は大きいものなのです。そして幼い頃に感じた記憶と、今現在、大人として再び見る目との差異を認識することも可能となるのです。

文化は脈々と続き、70年代、80年代と、常に若者は時代を彩る文化の産物とともに歩んできました。それらサブカルチャー・アイテムの数々は、めまぐるしく質的変化を伴い、量産されては消えていきました。時代の移り変りに平行するかのごとく登場してきた様々なモノを顧みることで、ノスタルジックな思い出探しに浸ってほしいと思います。とかく物騒な事件が世間を震撼させ、人の心に余裕が感じられない今だからこそ、必要不可欠なことではないでしょうか。自分史の原点に還ることで、逆に未来への展望が開けることを信じて.....。

（中村武史）

府中市郷土の森にて

みて よんで あるいて ①

－郷土の森は「楽園」か－

小野　一之

まずは気軽に郷土の森見物。本を読んで考えるのもいい。他の博物館にも行こう。

1

深い緑のなかの古い草葺きの農家。燻されたような草木の薫りを嗅ぎながら炉端に腰を降ろしていると、野良仕事に出た人が今にも帰ってきそうな気がします。

ここ郷土の森に移築復元された古い農家や商家、町役場や学校などの間を歩いていると、昔のことを知らない人でも、なんだか「古きよき時代」に触れたような、懐かしい気分になりますね。その一方で、民主主義や人権の考えも少なかった時代に、庶民がどのような生活を強いられて来たか、ということも民家建築は静かに語ってくれるように思います。

2

一昨年、飛騨白川郷の合掌造りの民家群が世界文化遺産に登録されました。秘境といわれる豪雪地帯の山村に営まれた豪快な棟は、今や日本を代表する民家建築様式のひとつです。ここには40人ほどの大家族が生活していましたが、それというのも、貧しい生活の中で労働力確保の必要から男も女も家を出られなかった(嫁にも行けなかった。だから、男が通う「妻問婚」が生きていた)からです。しかも、大家族は1階の限られた場所で生活し、2階3階は養蚕の作業場だったのです。美しい民家も時には、監獄に見えることがあります。

民俗学者宮本常一らが執筆した『**日本残酷物語**』1〈**貧しき人々のむれ**〉(平凡社ライブラリー)は、この白川郷の話も紹介しながら、名もなき人々の嗚咽のような叫びを聞くことができます。

3

合掌造りは現地のほか、**日本民家集落博物館**(大阪府豊中市)、近くでは**川崎市立日本民家園**(川崎市)、**三渓園**(横浜市)などで見学できます。前二者のように全国各地の特徴的な民家を集めた施設では、住む家に対する先人たちの飽くなき工夫や努力の痕を発見するでしょう。そこまでして人間は生きていかなければならないのか、という感慨とともに。

北海道開拓の村(札幌市)は、北辺開発という特殊な事情が造り上げた建物群のゆえ、圧倒的な迫力を感じます。ただ、「開発」?された側の**アイヌ民族博物館**(北海道白老町)などの復元コタン(ムラ)もお忘れなく。

こうした「民家園」的な施設として、近県では、**千葉県立房総のむら**(千葉県栄町)などが必見です。

4

ここ**府中市郷土の森**は、市レベルの限定された範囲の諸建築を集中的に集めた施設として貴重です。びっくりするような珍しい建物ではありませんが、かつてどこにでもあったあたりまえの風景にタイムスリップすることができるでしょう。

古民家めぐりのガイドとしては、書かれたのは少し古いですが、**宮本常一**『**日本の村・海をひらいた人々**』(ちくま文庫)、**今和次郎**『**日本の民家**』(岩波文庫)がわかりやすく、文章も味わい深いものです。府中を含む多摩地域の民家については、最近の『**多摩のあゆみ**』89号〈**特集・多摩の民家**〉(たましん地域文化財団)が、「見学できる保存民家」の一覧もついていて便利です。

5

5年前に江戸東京博物館の分館として造られた**江戸東京たてもの園**(小金井市)は、農家・商家・邸宅など20数棟を復元し、なお工事は継続中という楽しみな施設です。各建物内の当時の様子を完璧なまでに再現しているのも見事です。

これなどを見ていると、**小寺武久**『**尾張藩江戸下屋敷の謎**』(中公新書)でおもしろく紹介されている「なぜか三十数軒の町並みがあり、酒屋や薬屋・本屋などの店頭には本物の品々が並べられ、将軍たちも散策にたびたび訪れた」という江戸最大の大名庭園を連想してしまいます。たてもの園のみならず、方々の「民家園」の源流のひとつは、案外とこのあたりにあるのではないでしょうか。

6

本来の場所での保存が不可能になった古建築を、公共的に保存活用する場として始まった「民家園」的な施設が、文明史的には〈王国の縮図〉〈虚構の楽園〉としての目的と機能を持っていることにも注目してみたいと思います。そこまで考えると、話はテーマパークに及び、さらにあの〈理想郷〉としての〈魔法の王国〉(**能登路雅子**『**ディズニーランドという聖地**』岩波新書)との比較も楽しむことができそうです。

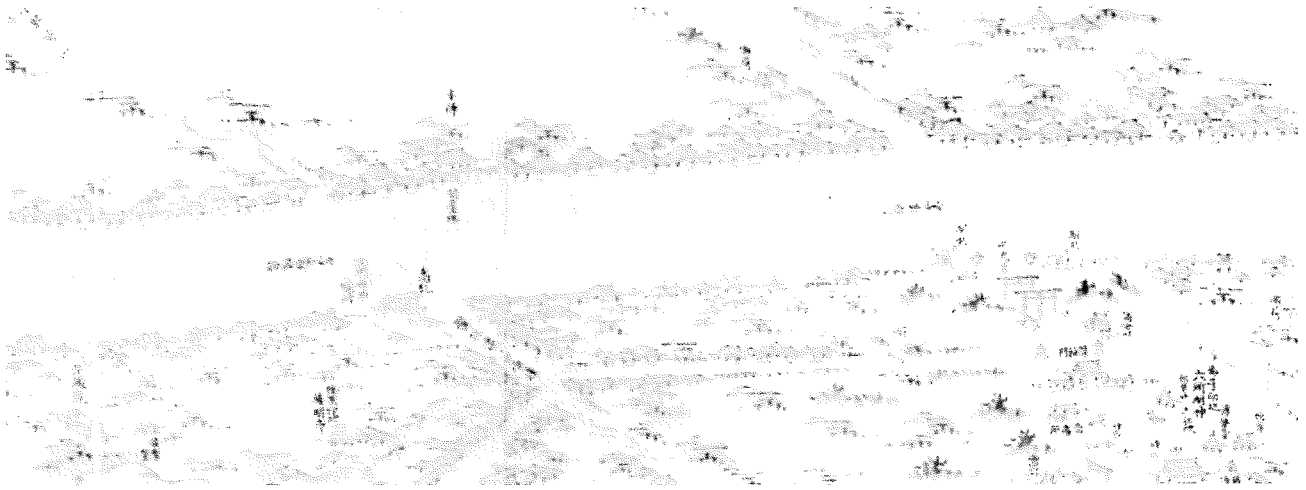
さて次回は、ディズニーランドに行きますか、それともまた郷土の森にしますか。

NOTE

府中宿本陣抄

もしかしたら飯売旅籠？

馬場 治子



『甲州道中分間延絵図』にみる府中宿

▼ 府中宿本陣職と場所

少し前、他所の古文書を読んでいましたらこんな記事にぶつかりました。ある日、内藤新田の百姓重兵衛の所へ、府中本町の本陣三郎右衛門が倅の名義で経営している飯売旅籠の抱え女が、重兵衛の倅と夫婦約束をしたのに最近ちっとも来てくれないと押し掛けて来て、一騒動持ち上がったのです。おそらく江戸時代後半のものと推定できました。騒動の方はいつの時代も男女の仲はいろいろ大変……ですが、それはさておき、本陣職が飯売旅籠(飯盛旅籠)をしている事の方が興味を引きました。

本陣とは元来は軍事用語で、総大将の居所、軍陣の中核つまり本営の事でした。それが転じて江戸時代には、大名や公家、高僧、幕府役人、といった貴人の旅中休泊する宿のことを言うようになりました。

何でも書き留めた大田南畝は文化6年(1809)「向岡閑話」の中に、府中の本陣扇屋三郎右衛門が高橋氏で、先祖は後北条氏滅亡後に是政の井田氏と共に府中に来たが系図は無くなっている、と記しています。

これまで府中宿の本陣については、寛政8年(1796)の「府中宿書上帳」や文政4年(1821)の「宿方明細帳」の記載から本町の三郎右衛門が勤めていて、天保14年(1843)の改めによる「甲州道中宿村大概帳」や弘化2年(1845)の「宿明細帳」にあるように天保6年(1835)の府中宿大火で類焼したまま復元されず、幕末には番場宿の信州屋(矢島九兵衛)が勤めたこともあった、と大まかにしか言われていません。

場所についても、現在の旧甲州街道と府中街道との交差点北東側と言われていますが、それが図示されているのは、幕府道中奉行の命によって綿密に調査・編纂され寛政12年(1800)に完成を見た、いわゆる「甲州道中分間延絵図」しか今のところありません。かつて府中宿の町並みの復元を研究された嗣永芳照氏も史料の少さから延宝検地以後にこの位置に設置されたのだろうと推察するに止まらざるを得ませんでした。

宿場の代表的な施設である本陣についてこれではあまりに漠然としています。少いながらももう少し史料を検討できないのか試みることにしましょう。

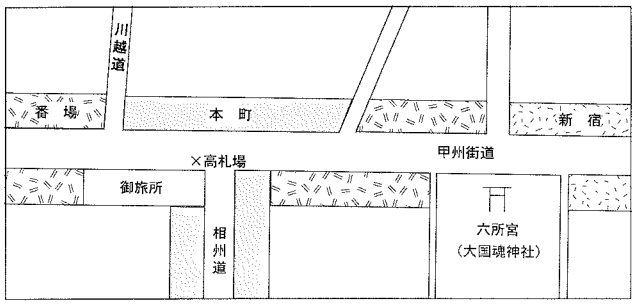
幕政の中で宿場の支配系統は、やはり17世紀後半に整理されていき、享保9年(1724)までに道中奉行の所管となりました。しかし宿場はまた、一般行政的には年貢を納める“村”でもあるのですから、言わば領主と道中奉行との二重支配を受ける形になります。

甲州街道は五街道の中でも余り交通量も多くなく、一つの宿場を維持するにも何村かが一緒にしている例が多くあります。府中宿も本町・番場・新宿の3町(行政的には村)が1ヶ月を3交替で公用の輸送や宿泊という仕事を分担していましたので、その事務所である問屋場は各町に置かれていましたが、本陣は本町に1軒、脇本陣は番場と新宿に1軒づつでした。

本町というのはその名からも分かる様に府中宿の最も古い地区ですが、町筋は甲州街道ではなく相州道(現在の府中街道)に面しています。

これは古代以来、府中にとっては東西道より南北道

のほうが幹線だったからです。近世になって東西道である甲州街道の重要性が増すと、この両道の交わる所が宿場の中心となりました。そこは“辻”とも呼ばれ、今でも高札場が東京都の旧跡として残っています。ところが辻から北へ伸びる川越道の始点は、古い道によくある様に相州道と鍵の手になっていて、相州道と甲州街道のＴ字のつきあたり部分も本町に属していました。「分間延絵図」で見ると、そこに“問屋場”と“本陣”が隣合っています。今は府中街道がまっすぐ北へつながっていますからちょうど道路になっている辺です。



府中宿町筋

▼本町村役人と本陣

村に名主や組頭という村役人が置かれたように、宿場差配の責任者は問屋・年寄という宿場役人でした。大抵の場合、地域の有力者が村役人と宿場役人を兼任しているのが普通です。さらには本陣職についても、格式のある建物を維持する事を思うと彼らの中から選ばれるのは当然のことでしょう。このことから、史料の偏在、襲名の不確認という事は一先ず置いて、三郎右衛門が本町の村役人或いは宿役人として勤めているかどうかを周辺の古文書から探してみました。

最も古くは延宝6年(1678)の検地帳に府中三町の案内人として筆頭に挙がっていますが、彼の名が集中するのは安永９年(1780)から文化２年(1805)で、寛政８年(1796)の時点では名主・問屋・本陣の３職を兼任しているのが確かめられます。

府中新宿の場合だと、安永～天明年間頃に近在の村々から移り住んで来た家が多いと推定できるので、この時期にようやく府中宿は活気を呈してきたのでしょう。それにつれて問屋や本陣の仕事量も負担も増していったに違いなく、社会全体の動きも大きくなっていきました。三郎右衛門の飯売旅籠もおそらくこの頃開業したのでしょう。

ところが文化4年(1807)、本町では年番名主制をとりますが、そのメンバーに三郎右衛門は入っていません。村や宿の行政・経営が集団でなければ責任を負いきれなくなった事態に到り、地域のリーダーも古い家格だけでは勤まらなくなったものと思われます。

それでも三郎右衛門は引き続き本陣職は勤めていた様ですが、冒頭の事件がきっかけで、文化14年(1817)に彼の所有だった問屋場の土地を抵当に入れる事になり、彼と宿場での公的役割とが又一つ分離されたようです。

▼借地の本陣

三郎右衛門と本陣の関係も終わった事は、さらにこの後、文政７年(1824)に本町の村役人が問屋場・本陣共に地主と借地代の契約をして、本陣に使える家屋が他には無いので、そのまま使用できる様にと頼んでいる史料から窺えます。

また偶然ですが、参勤交代の時に甲州街道を通行する数少ない大名の一つ高遠藩の史料の中に、文政11年(1828)3月の“府中泊　御本陣清水政右衛門”とあるのを見つけました。するとこれは、政右衛門が本陣職を引き受けてはいますが、建物は村の連帯責任のものだったという事になります。役宅＝自宅という江戸時代の通念からすると珍しい事ですが、本町としては合理的な処理だったと言えるでしょう。

ただ気がかりなのは、同年の記載で問屋場の周囲を表した絵図面があって、それには本陣が示されていないことです。「分間延絵図」の本陣と思われる所は、後年“富久本屋”という飯売旅籠の持主と確認できる人の屋敷地となっています。だから、本陣が借地をしたのは数年の間だけで、文政11年には政右衛門の自宅を本陣に使ったとも考えられます。

しかしもっと大胆に推理すれば、三郎右衛門は本陣とは別に飯売旅籠をしていたのではなく、二つは同じ建物で、他へ譲渡されてからもそこは飯売旅籠が通常で、必要な時だけ本陣となったのかもしれないのです。

そんな経緯があったものですから、天保6年に焼けると、本町村役人達の中では積極的に再建する気運が盛上らなかったに違いなく、仮住居や番場での肩代わりをしているうちに幕末を迎えました。本陣と言えば、近代の足音に苦悩した『夜明け前』の主人公が想われますが、“すべて山の中”でなく江戸にも近い府中宿では、関東周辺の治安問題や伝馬制の危機など世の中の大きな動きの中で、変化は文化・文政期に訪れたようです。

〔参考〕

『甲州道中分間延絵図』東京美術

嗣永芳照「甲州街道府中宿の復元的研究」

（『府中市郷土の森紀要』No.2）

『新宿　比留間家古文書目録』(府中市内家分け古文書目録１)

かめらと～きんぐ

やっぱり、お目当てはこれ！

真剣なマナザシで黒塚古墳の三角縁神獣鏡に魅入る人たち。ケースのガラスは、拭いても拭いても、手や額や鼻の頭のアブラだらけ。見にくかったお客さん、ごめんなさい。

『大和まほろば』

4／4～5／10に開催の特別展

奈良県出土の考古資料が所狭しと列べられ、4／14からは、話題の黒塚古墳出土三角縁神獣鏡も加わり、日曜・休日には人も所狭しと列をなす盛況ぶりとあいなりました。

展示の目玉は黒塚だけではなかったのですが、観覧者はやっぱり黒塚に集中。

中山大塚古墳の内行花文鏡・島の山古墳の石製腕飾類・藤ノ木古墳の金銅製馬具などなど。

ちょっぴりかわいそうな優品たちでした。

会期中、いろんな質問がありました。そのひとつ。

Q：なぜ、こんなに早く、しかも、府中で黒塚の鏡が展示できたの？

A：今回の展示会は、奈良県立橿原考古学研究所設立60周年を記念した企画。全国数か所で開催の予定のその企画に、トップバッターとして郷土の森が名乗りを挙げたのは残暑の頃。代表的な資料を惜しみなく出品することを約束してくれていたが、もちろん、その時点では、黒塚古墳の鏡は見つかっていない。

ところが、11月頃からただならぬモノが見つかっているというウワサ。しばらくして、三角縁神獣鏡の多量出土とわかった。「できるならコレも」と申し出るまでもなく、研究所としても60周年記念事業であるから、最大限の協力をしてくれた。会期途中からではあったが、地元奈良を離れて、初めてのお披露目。いやはや、タイムリーな企画になったものだ。

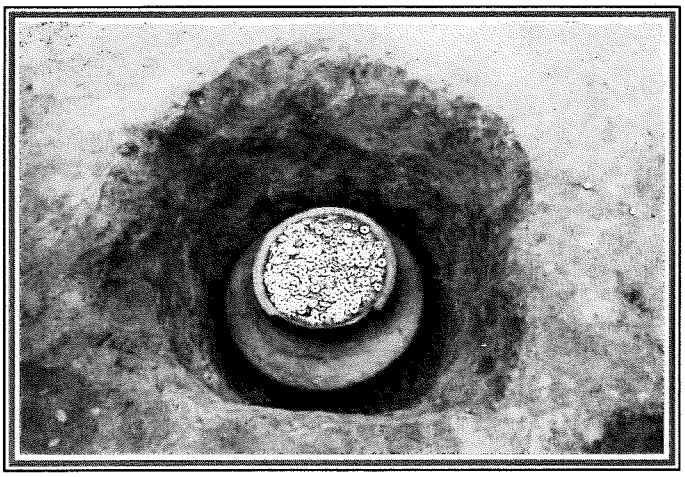
まほろば展ではじめて府中へ足を運ぶ人も少なくないはず。府中の古墳時代も知ってもらえたらと、ミニ展**「古墳時代前期4世紀のムラ」**を常設展示室で開催。見学者が写っていないのは、閉館中だから。閑古鳥が鳴いていたわけではない。

最近の発掘調査

埋められた渡来銭

並木西ビル地区から

府中市遺跡調査会　宍野　佐紀子



裏の畑を掘ってみたら、大判小判がザックザク、というのはおとぎばなしですが、裏の畑ならぬ発掘調査現場で、大量のお金が地中から掘り出されました。

大量のお金が見つかったのは、京王線府中駅のすぐ近くのけやき並木沿いの発掘調査現場です。大判小判とはいきませんが、常滑焼（現在の愛知県常滑市周辺で焼かれたやきもの）の大きな甕いっぱいに青銅銭が詰められていたものが２つ見つかりました。２つとも地面に掘り込んだ穴の中に大甕を置き、丸く加工した緑泥片岩（埼玉県秩父地方でとれる、板状にはがれやすく、やわらかい緑色の石）で蓋をしてありました。

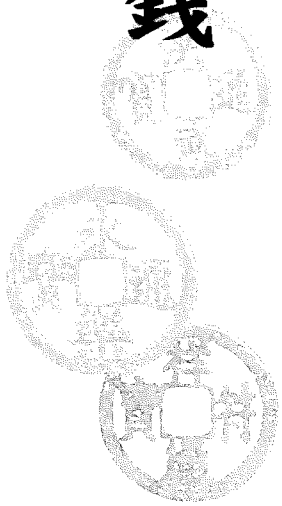
青銅銭については、まだ細かな調査を行っていないので詳しいことはわかりませんが、今のところ、「永楽通宝」「洪武通宝」など７種類を確認しています。これらはみな中国で作られた、いわゆる渡来銭です。確認した渡来銭のうち、一番新しいのは「永楽通宝」で、1408年にはじめて作られています。したがって今回見つかった大量の銭は、このころ、つまり今から500年位前に埋められたのではないかと考えられます。

さて、この大甕にはどのくらいの青銅銭がはいっていたのでしょう。まだ数えていないので、重さから推定することにします。２つのうち、小さいほうの重さは中身だけでおよそ250kgあり、大きいほうはおよそ380kgもありました。青銅銭の重さを１枚４gとして計算すると、なんと62,000枚と95,000枚、合計157,000枚にもなります。このような青銅銭の大量出土は全国各地で見つかっていますが、これだけの枚数は都内ではダントツの１位で、全国でも第６位にランクします。

それでは、なぜこれだけ大量の青銅銭を地中に埋めたのでしょうか。実のところよく分かっていません。今からおよそ500年前といえば、室町時代の終わりごろ、まさに戦乱の世となるころですから、何かあったときのための備えとして蓄えたものとする考え方があります。一方、商業用の資金や貸付け金ではないかとする意見もあります。また、神仏に奉納したものだという考えもあります。このように、大量の青銅銭を埋めた理由は、簡単に答えがでそうにありません。

しかし、いずれにせよ、中世の段階でこれだけ大量の銭を持っていられるほどの裕福な階層が、この府中にいたことがうかがえる資料といえるでしょう。

実際、何種類の青銅銭がはたして何枚はいっているか、調査結果を楽しみにしていてください。



青銅銭・渡来銭

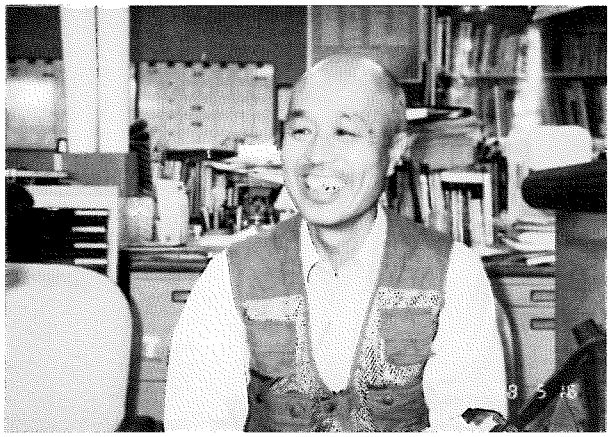
「青銅銭」は、今の五円玉のような、中央に四角い穴のあいた青銅製の古銭のことです。日本では奈良時代に「和同開珎」が作られたのが最初です。奈良・平安時代では日本でも青銅銭を作っていましたが、中世になると日本では作られなくなり、中国や朝鮮の青銅銭を輸入して使っていました。これが「渡来銭」です。以後、江戸時代になって「寛永通宝」が作られるまで、渡来銭を使っていました。

ザ・プロフェショナル

相馬 尚教

第1回を飾るのは、相馬尚教氏。府中第一中学校教諭として活躍する傍ら府中市自然調査団野鳥班としても、長きにわたって郷土の森とは関わりの深い人物である。貴重な時間を割いて博物館と自然教育についての思いを語ってもらった。

インタビュアー・T.NAKAMURA



郷土の森が10年以上の時を経過して、オープン当初は葉も繁らなかった植栽樹も、根を大地にしっかりとおろし、うっそうとした本来の森である様相を呈するようになったのは最近のことである。月日の流れを実感すると同時に、この10年を影で支えてくれた様々なスタッフの、惜しみない協力と努力が内面からも充実した深い森を形成してくれたのだと思えるのは、偽りのない本音である。そんなかけがえのない各種分野の達人たちにスポットをあててみたい。

「郷土の森も10年を経過して考えるのは、この博物館の生物系は自然調査団の力によるところ大だなぁとあらためて思うんですけど、もう29年目を迎える調査団の発足時のエネルギーっていうのは凄かったんでしょうね。」

相馬(以下S)「エネルギーというか、府中市の歴史の中では初めてのことでしたからね。昭和44年ですか、だいぶたちましたねぇ、へへへへ。結果として郷土の森博物館の展示に役立つ基礎データになりましたが、単純に市としても、今やっておかないと自然がどう変化していくのかわからないという見地から結成されたんですよね。丁度、自然に目を向けようという周囲の気運も高まってきたこともあって、基礎データを集めよう、調査というよりはどんな生物がいるのか調べよう、という感じで始まったんですよ。どういう人にやってもらおうかと、一番多かったのは学校の先生たちで、そうですねぇ、専門家というか、強い興味を持っている人が集まりましたね。最初はスタッフも少なくて植物、昆虫、野鳥ぐらいの分野でしたか....徐々に広がっていって地質、地理分野にまで及んだわけです。当時、府中の自然ガイドブックというのを発行するということで、余計に拍車がかかって、生物全般の基礎的なデータはここでほとんど揃いましたよ。」

「その時代の集積が功を奏しているわけなんですが、おそらく自前の自然調査組織としては、このあたりじゃぁ府中ぐらいでしょうね。お陰様といいますか、ずいぶんと郷土の森ではその成果を利用して、展示などに生かしている、といった実状についてはどう思われますか。」

S「役立っていることは大変ありがたい。せっかく調査してきたものだから広く市民を始めとする近隣の人たちに知らせたい、そして自然に目を向けさせたいと思うのは当然ですよ。だから博物館の展示展開は絶対必要！　本当はね、当初の目的はただの調査だけだったんですよね。でもやっぱりその成果を見せたい、興味を持ってもらいたい、という欲みたいなものが出てきてね、みんな、調査だけ人間だったのが、さてどうしようか、どんな風に見せようかなんて考えるようになってきて....博物館と関わっているうちにみんな学芸員ぽくなってきたかな、ハハハ。こういう相互作用で向上していくんじゃないのかな。」

「展示に限らず、実際に野外に出掛けていく観察会や、総括的、あるいは各論的な解説で理解をもとめる講座にも必要性はあると。」

S「それがあるから調査に熱が入るんですよ。興味深いデータを集める、話のネタを集めるのは楽しみでもありますからね。」

「まぁ、現実に10年以上も観察会や講座をやってきて思うのは、参加者の熱心な姿勢というのはものすごいなぁって。感心を通り越して感動の域に入るくらいですけど、こういう方たちの今後の育成というと語弊がありますが、ベーシックな人たちがより関心を高めていくにはどのようなことが考えられますか。」

S「そうですねぇ、例えばそういった人たちが自主的にグループを作って観察会を実施する、調査を行いデータを博物館に報告する、なんてなったらいいですね。野鳥に関していえば、その頃の興味を持ったメンバーが集まって“府中野鳥クラブ”に発展したわけで、今じゃあ御存じの通り活動力旺盛で、年毎にデータを博物館に持ってくるでしょう？功績は大きいよね。ま、こんなようにグループが成長してくれば、おのずとその中で育成というものは考えられるから、観察会もそんな発展の仕方をしてくれればとは思います。成長して実がなって種を飛ばして、やがてまた森に還ってくる結果になればということですね。」

「そう、森といえば10年たって本当に郷土の森も“森”らしくなってきましたが、2年ほど前ぐらいからでしょうか、先生には園内の野鳥を調査してもらっていますよね。やっとこさ10年、郷土の森という、もはやひとつの生態系として成り立っている園内を調査する意義をどうとらえますか。」

S「調査団の会合がおととしでしたか、あった時にその話題が出て、園内の調査というか、生物相を調べたらどうかという…一番感じたのは、郷土の森みたいにフィールドを持って

いる博物館は、その自分の庭のデータがある程度整っていないとまずいと思ったんです。博物館である以上、責任としてきちんと基礎データを持っていないと、とは前々から考えていてそれが一致したわけですから、じゃあやりましょうって。早く始めてよかったかな。」

「先生は以前、教育園(目黒の国立科学博物館附属自然教育園)にいらっしゃって、つまりは学芸員だったんですよね。教育園と郷土の森では比べものになりませんけど、博物館のフィールドとしては一致しますし、当時"園"というものに携わっていたことは今回の園内調査にオーバーラップしますか。」

S「それは根底にあるよ！目黒でやってたんだから、府中でも出来ないとね。責任もあるし、そうじゃなきゃやっていませんよ。博物館人間だったからこそね。」

「その園内野鳥相の報告第一報は、昨年度末に郷土の森紀要で発表されたんですが、実際どうですか、歩いてみた感想というのは。」

S「う～ん、正直10年前から歩きたかったね。本当に後悔してます。園内の自然の経過を見逃してしまったという感が物凄く強いですね。鳥や昆虫がどう自然を作り上げていったのか....今となっては遅いかな。私はヘリコプターに乗った事はないけれども、上空から鳥の眼で郷土の森を見てみたい。下の緑がどう映るのか、きっと鳥にとっては安楽地なんだろうなぁ。園内を歩いてみて、鳥の種類や数が豊富なのには驚いた。住宅地の中にあって、環境的に恵まれているんでしょうね。多摩川が南を流れている、池がある、ハケ下の流れがある。水が存在するってことは鳥にとってはすごく大事なことですから、郷土の森を作る時のコンセプトは間違ってなかったことになりますね。それに一定の環境だけがあるわけじゃないでしょう？雑木林、池、芝生、流れと、同一の森ではないですから、いろんな種類が見られるんだと思います。スズメやムクドリが多いのは仕方ないけどね、ハハハハ。」

「それだけにまさに後悔先にたたずと ...」

S「二度と出来ないからね。最初から調べた方が面白いし、価値も出るからどっかで新しい博物館でも作るときにチャンスがあったら、なんてね。」

「さて、自然調査団の多大なる実績と功績が今の郷土の森の自然分野を支えていることは十二分に理解しますが、今後そういったデータを中心に博物館で発展させていくための方法論上でヒントになるようなことをお聞かせできればと思いますが。」

S「今やっている園内の野鳥にしても、その基礎的なデータの収集は数年続けないといけないでしょう。最低5年位ですかね。自然科学は長期的スケジュールでものを考えないと意味がないし、生態どうのなんて言えなくなっちゃう。これからどんな種類の調査に出会うかわかりませんが、この姿勢は崩せないですね。あとは、成果は必ず活用するということ。ただの報告で終わってはダメでしょう。例えば園内も鳥に限らず他の生物も情報が整ってくれば、ここにはこういうものがいつ頃見られる、とかの案内板やパンフレットを用意できる。あるいは、これだけ整ってきたら園内の自然観察会を開けば、色々な調査データが使える。とにかく一人でも多く、自然のサジェッションがしたいんですよ。

「そういう意味では、鳥に関してだけではありますが、ここ数年園内での観察会を試験的にやってきましたもんね。感触としてはイケル！という気はしています。どうですか、関心も高まっているわけですから、期待してもいいんですかね。」

S「うん、どうしたらわかってもらえるのか。観察会なら観察会の資料を作ったりして努力は続けるんだけど、園内だからできるという部分はあるんですね。外にでてしまうと、どうしても周囲に気がまわってなかなかできない、じっくり観察するということ。ただ見る聞くだけでなく、どこに特徴があるのか、たとえば絵に書いてもらって体験する場所的な余裕も、園内だからっていう部分があるわけですよ。」

「これからもぜひともご協力よろしくお願いいたします。では最後にもうひとつ、先程も話に出てきましたが、過去に学芸員、そして現在は学校教員という、いわば社会教育と学校教育両方の現場を経験されてきた立場で、今後学校がどのように博物館を利用していけば良いのか、もちろん自然教育を通じてで結構ですが、お聞かせください。」

S「実際に学校教育の中では、そう、中学一年生が校庭の草木を見ようという単元があって、ある学校は外に出て観察し、標本にもするが、こっちの学校では案外おざなりに消化してしまうような....ね。連れていって先生が指導するというのには、よほど自然科学の知識がないと難しいんですよ。生徒にしてみりゃあ、興味を持つような話や資料を用意してやらないと頭に入らないし、いや、これはやな言葉だな、印象に残らないからね。だからこそ博物館の専門の方が指導してほしいんです。あそこへいけばちゃんと理解できる、という安心感ですか。今後、学校もカリキュラムが変わって今よりもフィールドワークが増える可能性もありますから、連れて来た時に指導してもらえる信頼感というものを博物館との間につくっていかなければならないでしょう。まだ中学校は専科の先生がいるからいいんですが、一番困るのは小学校で....小学校は全教科教えるでしょう、専科の先生は少ないんですよ。当然先生は万能ではありませんから、余計にてこずっちゃうんですね。キャ～！私はミミズはつかめない、とかね、ヘヘヘ。」

■平成９年度 寄贈・寄託 資料一覧

□寄贈資料
▨寄託資料

	寄贈者	資料名	分類	数量
1	秋元　良夫	新宿秋元家文書(昭和初期東京府電話帳)	歴史	9
2	府中市役所	複製　元禄年中改定官版武州多摩郡絵図	歴史	1
3	菊池　敏夫	新宿菊池家文書	歴史	一括
4	比留間正次	新宿比留間家文書	歴史	一括
5	都築　祐介	小金井　府中六社・井の頭弁天画帳	美術	1
6	望月　辰夫	あんか	民俗	1
7	和泉ゆかり	会津塗膳５脚（箱入り）	民俗	1
8	山内　哲夫	釜	民俗	1
9	渡邊　　明	たらい　洗濯板　飯台　裁台	民俗	4
10	菊池　敏夫	茶碗　酒樽　衣類　他	民俗	一括
11	田中　　清	府中尋常高等小学校修業証書	教育	1
12	菊池　敏夫	教科書　他	教育	一括

■平成９年度 利用状況

（H9.4.1～H10.3.31）
開園日数319日

区分		有料 一般	有料 団体	減免(身障者等)	合計
入園者	大人	182,440	8,149	15,929	206,518
	子供	46,605	19,808	3,387	69,800
	小計	229,045	27,957	19,316	276,318
博物館入館者	大人	14,866	3,729	4,271	22,866
	子供	4,925	10,422	448	15,795
	小計	19,791	14,151	4,719	38,661
プラネタリウム観覧者	大人	31,143	3,607	1,703	36,453
	子供	17,761	14,865	1,717	34,343
	小計	48,904	18,472	3,420	70,796
合計		297,740	60,580	27,455	385,775

郷土の森の新刊紹介 ―INFORMATION―

■ 府中市郷土の森紀要　第11号　¥1,300
- 府中市に生息する注目すべきクモについて
- 府中市郷土の森の鳥類について
- 多磨霊園・浅間山の鳥類について
- 府中用水に関する地理的研究(１)
- 府中用水に関する地理的研究(２)
- 高倉古墳群出土の銀象嵌装大刀
- 「国民学校」時代の教育資料について
- 「日露戦争記念碑」と「忠魂永存碑」

以上論考８編を掲載

■ 府中市内家分け古文書目録１　新宿　比留間家文書目録　¥　200

■ 特別展「武蔵野の春－花の名所のなりたち－」　¥1,000

■ 特別展「大和まほろば－ヤマト王権と古墳－」　¥2,000

※あるむぜお　イタリア語で‘博物館で’‘博物館にて’の意

府中市郷土の森だより〈あるむぜお〉第四四号　発行日　一九九八年六月二〇日　編集・発行　（財）府中文化振興財団　府中市郷土の森　〒一八三－〇〇二六　東京都府中市南町六～三二　電話　〇四二（三六八）七九二一